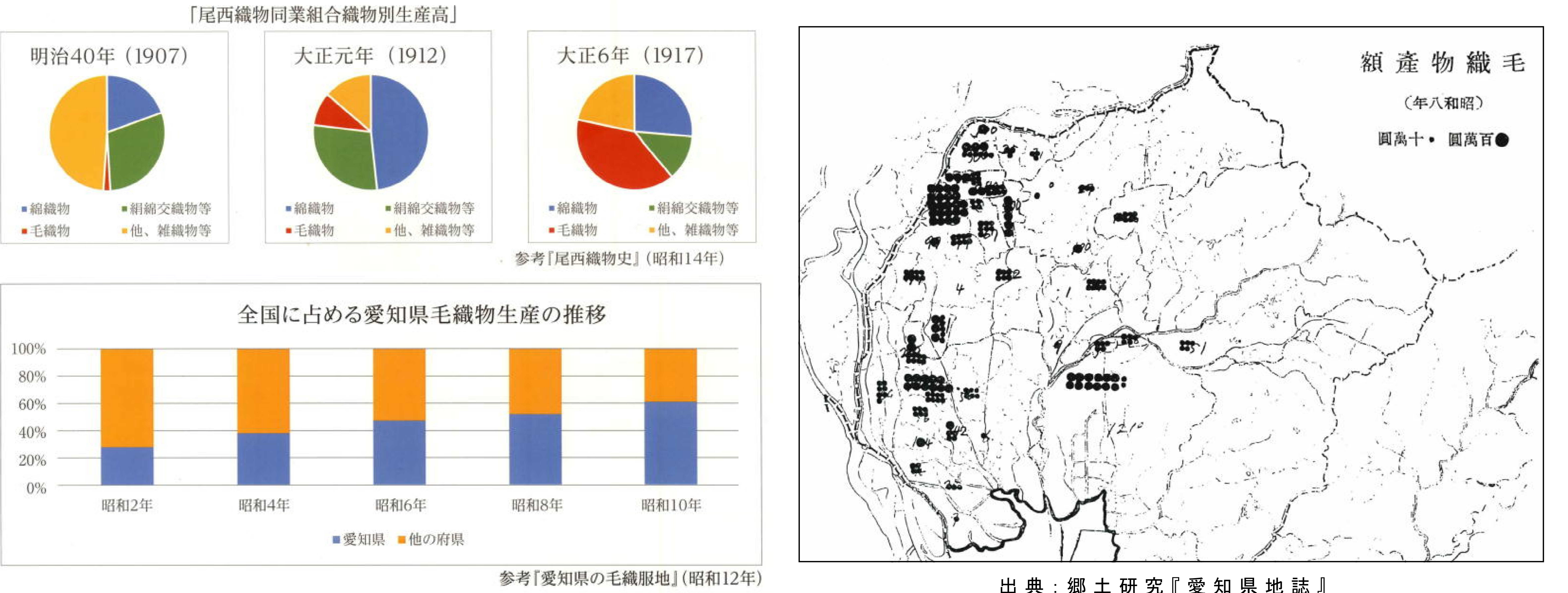


尾西毛織物業の発展

日本の毛織物生産の始まりは、明治12年（1879）、干住製絨所である。愛知県においては名古屋の吉村富三郎が同16年頃、綿毛布の製織に成功した。起町（現一宮市）の加藤平四郎は毛糸を購入し試織したが商品化できなかった。津島町（現津島市）の片岡春吉は同36年、純毛織物の創製に成功し、同37年の日露開戦の影響もあって、陸軍省からの注文により純毛の生地を製織し、軍服を生産した。同42年、片岡は諸機械を完備し、セルジス（セル）の生産に傾注後、純毛セルの生産に成功した。片岡の成功に奮起した尾西地方の機業家は純毛セルを織り、各工場で綿毛交織品を生産した。大正3年（1914）、第一次世界大戦で毛織物の輸入は途絶え、国産品愛用の高まりで当地の毛織物生産は、遂に全国一となり、尾西地方はセルの特産地としての名声を博した。同12年、起町の鈴木謙次郎等は尾西毛織物の品質向上を目指して「四幅毛織物研究会」を結成し、研究の成果により尾西毛織物の評価は高まった。

尾西地方（現一宮市、津島市）で発達した繊維工業及び製品を総称して尾西織物といい、尾西地方は古来絹織・綿織が発達し機業の中心であった。時代の要求と機業家の苦心の結果、毛織物に転換進展し昭和10年（1935）には国内の毛織物生産の6割を愛知県が占め、全国生産の3～4割を現在の尾西地域で生産された。この地域が毛織王国の名を得るに至った。毛織物産業が一宮市の地場産業として確立した時期でもあった。



出典：一宮市尾西歴史民俗資料館特別展「戦時下の織物業」

出典：郷土研究『愛知県地誌』

毛織物の分類:毛糸は梳毛糸と紡毛糸に、織物は梳毛織物と紡毛織物に大別される

	名 称	特 徴	用 途
梳 毛 織 物	サージ （セルジ）	綾目が右上がり45度の角度をした綾織物で和服ではセルジ（セル地）と呼ばれる	スーツ、学生服、コート、ドレス、スラックスなど
	ギャバジン	綾目が45度以上の角度を表すような縦系の密度を多くした綾織物	スーツ、コート、ユニフォームなど
	トロピカル	細番手の梳毛糸を使い、密度を粗く織った薄手の平織物	サマースーツ、夏の女子学生服など
	ドスキン	5枚朱子組織の柔軟で光沢のある目の詰んだ高級毛織物	礼服、スーツ、ユニフォーム、コートなど
	モスリン	経緯糸とも梳毛単糸で織られた薄手の織物を指すことが多いが需要は減少	蒲団裏、腰巻、国旗、家具裏、着物裏地、幕地、婦人子ども着物、帯など
紡 毛 織 物	ツイード	いろいろな色糸を混ぜて織るためカラフルな色彩と独特な風合いが好まれている	ジャケット、コート、スカートなど
	フラノ	通常は紡毛糸を使った平織または綾織物であるが、縦糸に梳毛糸、綿糸を用いることがある。起毛した薄手の織物	婦人服地、紳士服地など

出典：おかしん総研『あいちの地場産業』の「毛織物」に一部追記